

2023 年度事業報告

(自 2023 年 2 月 1 日～至 2024 年 1 月 31 日)

公益社団法人 日本薬学会

I はじめに

日本薬学会は薬学における中核的学術団体として、医薬品の創製、製造、有効性と安全性、供給、適正使用、生体での作用機序に関する情報発信・交換・支援をはじめ、広く医療機器、再生医療、予防医学や生命科学に関する学術や産業の発展に貢献してきました。また薬剤師教育・薬学に関わる人材育成に関して文部科学省、厚生労働省、日本薬剤師会、日本病院薬剤師会、医薬品関連産業界や健康・医療関連産業界等との連携を基に、責務を果たしてきたと考えています。2023 年度に取組んだ主な事項について以下に示します。

- ① 日本薬学会の最大の学術活動となる第 143 年会（札幌）が、2023 年 3 月 25 日～28 日に「ファーマサイエンス：つながる・つきぬける」をテーマに、北海道大学の南雅文組織委員長の下で、新型コロナウイルス感染症の感染状況が沈静下し始めた機を捉えて、3 年ぶりに現地に於ける集合開催とオンライン開催のハイブリッド形式で開催されました。
- ② 我が国で初めて「薬」をキーワードにした学術団体を束ねる日本薬系学会連合の設立に貢献しました。2024 年 2 月 2 日に一般社団法人となり、会員学会は 31 学協会となっています。2024 年 5 月 11 日には、設立記念フォーラムが長井記念ホールにて開催される予定です。
- ③ 学会の支部・部会は、支部長会議と部会長会議の交流を通じて互いの位置づけを共有した上で、個々の計画に基づき活発な学術活動を展開しました。
- ④ 学術誌の更なる充実発展を目指し、Chemical and Pharmaceutical Bulletin、Biological and Pharmaceutical Bulletin について、2024 年 1 月号よりオープンアクセス誌への移行を開始いたしました。論文受理から発行までの期間の短縮、投稿数増加、被引用回数の増加を目的に、毎月 Newsletter を配信すると共にファルマシアにグラフィカルアブストラクトを毎月掲載しています。生物系オープンアクセスジャーナル BPB Reports も、順調に論文が掲載されています。また、審査に貢献した査読者、被引用数の高い論文、掲載数の多い著者を選考し、賞を授与しております。学会誌ファルマシアは本学会会員を含め、多くの薬学関係者への有効な情報提供を継続しています。また、ペーパーレス化推進のため、電子本を発行しております。
- ⑤ 学会主催の創薬セミナーは、新型コロナウイルス感染症の感染法上の位置付けが第 5 類に移行したことを受けて、4 年ぶりに現地開催致しました。2022 年度に開催して好評だった、「学位（博士）取得者のキャリアデザインに関するワークショップ」をオンラインで開催致しました。薬学教育や薬剤師プロフェッショナルリズム、並びに急速に進化する AI と創薬・医療の未来をテーマにした公開シンポジウムを日本学術会議と共同主催の形式でオンライン開催し、多くの視聴者を得て、情報発信として十分な成果が得られたと考えています。
- ⑥ 今年度も長井記念薬学研究奨励支援事業により博士課程大学院学生の勉学支援が行われました。また、博士学位取得後、研究者として活躍されている本支援の受給者を表彰するために 2021 年度に新設した「長井記念若手薬学研究者賞」の受賞者を今年度も選考しました。
- ⑦ 本学会の「男女共同参画社会づくり宣言」女性研究者のキャリアアップ並びに研究活

動の支援を進めるために 2021 年度に新設した「女性薬学研究者奨励賞」の受賞者を今年度も選考しました。

- ⑧ 国際交流活動のさらなる活性化のため、発展著しいアジア諸国と、次世代の薬学研究を先導する人材育成に資する連携を強化することを目標に、第 143 年会（札幌）で台湾、タイ、マレーシアの若手研究者を招聘して「次世代薬学アジアシンポジウム」を開催しました。また、韓国薬学会（PSK）からの講演者を招待して二国間交流事業シンポジウムを開催しました。札幌年会での懇談に基づいて、2023 年 9 月に会頭が台湾を訪問して、台湾薬学会と MOU を締結しました。さらに、2020 年に初めて合同シンポジウムを行ったカナダ薬学会から講演者および学生を受け入れ、2 回目となるシンポジウムを開催しました。ドイツ薬学会（PSK）との連携では 10 月に開催された年会に会頭と第 144 年会組織委員長をシンポジストとして派遣し、現地にて代表者交流を行いました。ドバイ国際医薬品会議（DUPHAT）との連携では、主催者からの要請に応じ、シンポジストを派遣しました。第 144 年会（横浜）では、2023 年度に強化した連携に基づいた国際的シンポジウムを企画しています。
- ⑨ 日本薬学会は会員数の増加と活動の更なる活性化を目指し、若年層からシニアまでを対象とした新たな資格を導入しました。この取り組みにより、中高生のジュニア会員から、定年退職後も引き続き貢献できる終身会員やシニア会員として、薬学会の一員として積極的に学会活動に参加することで、薬学の発展に貢献いただくことを期待しています。

II 事業実施状況

1 代議員総会の開催

日 時：2023 年 3 月 25 日（土）

場 所：北海道大学 医学部学友会館フラテ フラテホール

2 学術研究・教育活動の推進

1) 学術誌の発行・表彰

(1) 学術誌の発行

学術誌の特性を最大限に活かした原著論文・総説の掲載により、薬学ならびに関連分野における科学の発展に寄与してまいりました。

本学会の学術誌への投稿意欲を高めるために、査読期間の短縮、出版までにおける作業の効率化を継続的に推進してまいりました。

YAKUGAKU ZASSHI では臨床薬学領域研究の多様化に対応するため、臨床薬学領域の英文投稿およびケースレポートを受け付けました。

英文誌ではテーマを絞った、興味深い内容のカレントトピックスを掲載しました。

英文誌はオープンアクセス誌への移行を開始いたしました。また、公開は Article-Based Publishing（順次公開）といたしました。

2023 年度の学術誌の刊行は、以下のとおりです。

① YAKUGAKU ZASSHI 第 143 巻

掲載論文数：137 編／昨年比編 19 減

（早期公開 7 編／昨年比 1 編減、英文投稿 14 編／昨年比 3 編増、臨床薬学領域 28 編／昨年比 3 編減（誌上シンポジウム除く）、ケースレポート 5 編／昨年比 1 編減）

発行部数：600部（月刊）

- ② Chemical and Pharmaceutical Bulletin(CPB) 第71巻
掲載論文数：126編／昨年比5編減
（早期公開20編／昨年比2編増）
- ③ Biological and Pharmaceutical Bulletin(BPB) 第46巻
掲載論文数：243編／昨年比10編減
（早期公開43編／昨年比5編減）

（2）授賞

学術誌発行において審査に貢献した査読者、被引用数の多い論文、掲載数の多い著者（連絡著者に限る）を選考し、賞を授与いたしました。

- ① Top Reviewer Award
YAKUGAKU ZASSHI、CPB、BPB（各1件）
- ② Highly Cited Review Award、Highly Cited Article Award
CPB、BPB（各1件）
- ③ The Most Published Author Award
CPB（1件）、BPB（1件）

2）オンラインジャーナルの発行

生物系オープンアクセスジャーナルのBPB Reportsでは、投稿者の幅広いニーズにこたえるため、学術誌3誌にはないReportという論文カテゴリーを設け、掲載を行ってまいりました。

2023年度の発行は、以下のとおりです。

BPB Reports 第6巻

掲載論文数：41編（昨年比13編増）2022年度：28編

3）J-STAGE との連携

（1）学術誌のオンライン公開

高度情報化社会の趨勢と、本学会の公益性を視野に、YAKUGAKU ZASSHI・CPB・BPBを年12回の発行日と同日にJ-STAGEにて全文公開をいたしました。また、BPB ReportsはホームページならびにJ-STAGEにて全文公開をいたしました。

（2）会誌のJ-STAGE公開

ファルマシアは、最新号の本文を年12回の発行日と同日にJ-STAGEにて公開いたしました。執筆者のご希望により、本誌でモノクロ掲載としている図をJ-STAGEでは電子付録にてカラー公開いたしました。なお1年未満の記事公開は会員限定としております。

（3）部会誌のJ-STAGE公開

MEDCHEM NEWSは年4回（2月・5月・8月・11月）の発行日と同日にJ-STAGEにて全文公開をいたしました。なお1年未満の記事公開は医薬化学部会員限定としております。

（4）ジャーナルコンサルティング事業への参加

CPB を対象にジャーナルコンサルティング事業のフォローアップコースに参加し、「ジャーナルの質向上」に関する取り組みを進めてまいりました。CPB とともに BPB も国際発信力強化につながるオープンアクセス化への移行を進めてまいりました。

4) 学術研究集会の開催および部会・支部活動の支援

(1) 年会の開催

年会は、領域の異なる研究者が一堂に会して、薬学の進歩を横断的に知ることのできる全国規模の大会です。特にシンポジウムの企画・募集にあたっては、多様な領域を包含できるものとなるよう留意してまいりました。第 143 年会および第 144 年会について、組織委員会を中心に次のとおり企画しました。第 143 年会は 3 年ぶりに現地にての集合開催とオンライン開催のハイブリッド開催といたしました。第 144 年会は完全現地開催のみとして開催いたします。

①第 143 年会（札幌）

日 時： 2023 年 3 月 25 日（土）～28 日（火）

場 所： 北海道大学

テーマ： ファーマサイエンス：つながる・つきぬける

組織委員長：南 雅文（北海道大学大学院薬学研究院）

②第 144 年会（横浜）

日 時： 2024 年 3 月 28 日（木）～31 日（日）

場 所： パシフィコ横浜

テーマ： 「遺伝子」や「環境」と共栄する薬文化の創生
～持続可能な“デジタル治療”の融合を目指して～

組織委員長：米持悦生（星薬科大学）

(2) 部会の活動

部会は、薬学研究の高度化と若手研究者や薬学生の育成を共通の主要課題とし、シンポジウム、フォーラム、研究会等を開催するとともに、創薬研究者の育成等、各部会の環境、状況にあわせて特色ある活動を進めてまいりました。また、部会間で協力し、他機関との連携を図りました。

(3) 支部の活動

支部は、地域ごとに会員が日本薬学会を身近な存在として活用できる場です。学生会員の積極的な参加を促す学術集会、地域薬剤師会との交流、薬学講習会での最新情報の入手、支部表彰事業ならびに高校生への薬学ガイダンス等地域の特性を生かした事業展開を行うよう努力してまいりました。一般社会へ薬学の正しい理解を広げるとともに、若い世代へ積極的に働きかけを行い、会員増強運動を進めました。

(4) 創薬セミナーの開催

本セミナーは、創薬に係わる最先端の話題と情報を提供し、今後の創薬に関して有益な議論をする場として、毎年開催しております。第 38 回セミナーでは、従来からの現地開催と同様に、社長講演、招待講演、自由討論会、産学連携を志向したポスターセッションを実施して、若手を中心とする創薬研究者がグローバルな視野で最先端創薬を考える場を提供しました。

・第 38 回創薬セミナー

日 時： 2023年7月12日(水)～14日(金)
場 所： Royal Hotel 八ヶ岳
参加者： 計131名(有料参加者89名：会員17名・
非会員68名・学生会員4名、関係者42名)

5) 学術研究・教育活動の奨励・表彰

(1) 研究奨励

日本薬学会では、博士の学位を有する多様な薬剤師あるいは薬学研究者の輩出により、薬学のさらなる発展に資することを目的として、日本薬学会学生会員が学位取得を目指して研究に専念するための奨励支援を行うべく、2015年度より採用者へ奨励金貸与を開始しました。2016年度より設置した長井記念薬学研究奨励特別委員会では、運用手続きの整備を行いました。当年度採用者を加え、貸与を継続し、また、選考委員会による選考結果を受け、2023年度採用内定者を決定しました。2022年度から顕彰事業として「長井記念若手薬学研究者賞」の授与を開始し、奨励金が如何に役に立ち、研究に向き合うことができたか、現在の研究状況、将来の抱負等の採用者からのメッセージを、ファルマシアおよび年会シンポジウムにて公表しました。

(2) 授賞

薬学研究の奨励・表彰は、日本薬学会の目的である薬学の進歩・普及にとって重要な事業です。2022年度より女性薬学研究者奨励賞を新設するとともに、佐藤記念国内賞の受賞対象をより明確にするためその名称を佐藤記念 医療貢献薬剤師賞に変更しました。それぞれの授賞規定に基づき各選考を実施し、その公正な選考結果を受け、2024年度学会賞受賞者を決定しました。奨励金の受領を終了し博士の学位論文提出から5年後の活動調査で、薬学の発展に寄与する強い意志を持って活動している研究者を表彰し、「長井記念若手薬学研究者賞」を授与しました。

① 薬学会賞	4件
② 学術貢献賞	3件
③ 学術振興賞	3件
④ 奨励賞	8件
⑤ 女性薬学研究者奨励賞	2件
⑥ 創薬科学賞	2件
⑦ 教育賞	0件
⑧ 功労賞	0件
⑨ 佐藤記念 医療貢献薬剤師賞	0件
⑩ 長井記念若手薬学研究者賞	6件

(3) 他機関関係賞等への推薦

各財団・機関から本学会への関係賞等の推薦依頼に対し、会員から候補者を選考し、推薦しました。さらに、国(省庁)による表彰について会員から候補者を推薦しました。

6) 薬学教育基盤の整備

薬学に関する学術の進歩を持続するためには学術活動に従事する人材育成が欠かせません。しかし、現在は大学院博士課程への進学者が激減しており、今後、研究能力を身につけ博士として学術を推進する人材（学会員）が不足する懸念が生じています。そこで薬学教育委員会は、本学会の目的である「薬学に関する学術の進歩および普及をはかる」に沿って、今後の学術進歩を担う若手人材の育成に貢献する活動を2022年度より開始し、本年度は以下の事業を行いました。各事業で開催したワークショップのプロダクトは報告書としてまとめ、日本薬学会の「薬学教育」のホームページで公開しています。

(1) 大学院進学促進事業

学部学生の研究マインドを高めることを目的に第1回シン・全国学生ワークショップ（WS）「研究マインドを活かすキャリアについて博士を取得した先輩と共に考えよう」を2023年8月11日（日）にオンライン（Zoom）で開催しました。参加者は各大学に本WSの趣旨に適った学年の学生の推薦を依頼し、64大学から71名の学生が参加しました。参加者の内訳は次の通りです：6年制課程67名（2年次3名、3年次16名、4年次45名、5年次3名）、4年制課程4名（3年次2名、4年次2名）。また、本WSには博士のロールモデルとして2022年度に開催したキャリアデザインWS参加者から有志12名が協力してくれました。参加者は研究マインドを熱く語り、目標とするキャリアプランを立てる貴重な機会となりました。

(2) 若手博士および大学院生のキャリアサポート事業

今後の学術研究の進歩を担う若手人材の育成に資する活動として、2022年11月に「学位取得者のキャリアデザインに関するワークショップ」を開催しました。このWSの継続活動として今年度は「大学院生および博士取得者のためのキャリアデザインに関するワークショップ」を2023年11月12日（日）にオンライン（zoom）開催しました。本WSには博士取得から5年未満の若手教員11名に加えて、博士課程および博士後期課程に在籍する大学院生36名が参加しました。テーマは「研究マインドを活かすキャリアについて議論し、将来の夢の実現につなげよう！」とし、参加者は学問領域や大学・職場の枠組みを越えて、学術研究やキャリアデザインについて意見交換を行いました。

(3) 第三者確認作業

社会に資する生涯研鑽支援活動の一環として、健康サポート薬局に係る研修プログラムを確認するための第三者機関として、2016年に厚生労働省から本学会が指名を受け、2020年度からは、特別委員会として設立されております。活動につきましては、前年度までに適合とした7機関からの更新申請を受けて確認作業を行いました。

3 学会情報の配信

日本薬学会の大きな役割に、信頼できる科学情報を社会に発信していくことが挙げられます。薬学関連の学術教育研究、医療における薬学の貢献、さらには薬学分野の

行政・産業等に関する最新の動向を、会員間のみならず広く社会と共有し、医療健康福祉社会の発展に寄与するために、適切な手段や機会、あるいは媒体を準備・提供し、会員相互および会員と非会員あるいは社会一般との間で接点を拡大し、情報交流を促進しました。

(1) 社会への発信

2023年3月13日に記者会見を行い、本学会活動、年会について情報発信を行いました。

年会組織委員会と広報委員会の共同発行による「講演ハイライト」にて、本学会会員の活動の紹介を行いました。

(2) 会誌の発行

会誌「ファルマシア」は、会員の広報誌として内外の情報を分かり易く提供し、また会員相互のコミュニケーションの円滑化をはかることを基本として編纂しております。学会広報および情報誌として一層の充実をはかるべく、特集号（6回）とミニ特集号（4回）の企画を含め、年間12号の発行を実施しました。J-STAGE 登載の周知や最新情報の発信に向け、HPの迅速な更新に努めました。

第59巻 発行部数 約14,000部（月刊）

(3) ホームページの更新

対外的にも興味を持っていただける情報発信を強く意識しつつ、一方で薬学に関係する若い世代へエールを送り、薬そのものや学会活動に関心を高めていただけるよう、学会の最新情報の掲載ならびに会員へ向けての情報公開に努めました。

より見やすくわかりやすい構成とすることを目指し、2023年6月にホームページの全面リニューアルを行いました。学術誌の情報掲載もこれまでより充実させたほか、一般からのアクセスも多い「薬学用語解説」については、部会の協力のもと、掲載語の見直しを行い、2024年2月にリニューアルを行いました。今後も見直し作業を終了した用語の追加を進めます。

(4) メールマガジンの配信

メールマガジン「ファームナビ」にて、配信を希望する会員登録者に日本薬学会の動向やメッセージを配信することにより、学会情報の共有化をはかりました。会員への一斉連絡用のツールとしても活用しています。

配信11回 配信数 14,703名（平均）

また、学術誌編集委員会の英文ニュースレターを通じて、年会、その他シンポジウム等の広報活動を行いました。

(5) 出版物

薬学紹介小冊子、「高校生のための薬学への招待」と「これから薬学をはじめるあなたに」は2021年2月の全面改定以来、累計32,000部が利用されました。高校生の進路指導資料として、あるいは薬系大学・薬学部1年生のガイダンス資料として活用されることで、薬学ならびに薬学部への正しい理解と知識を深める

ことに寄与しています。2023年度は、より多くの高校で「薬学」が進路として認識されることを目指して「高校生のための薬学への招待」の全国高等学校5,017校へのサンプル送付を行うとともに、PDF版の公開を開始しました。

(6) 会員向けお知らせページの活用

2022年6月に稼働開始した新会員システムの機能です。主に会員向けの事務連絡を目的としていますが、今後はより積極的な活用を目指します。

4 他機関との交流協力とグローバル化の推進

1) 他機関との交流協力

他機関との交流と協力をはかり、広く社会に貢献するよう努めました。

① 日本学術会議との連携

薬学の存在感を高めながら、我が国の科学技術の推進に寄与するため、科学者コミュニティを代表する機関である日本学術会議薬学委員会との連携・協力を保ち、共同主催にて以下のシンポジウムを開催しました。

- ・「薬剤師に期待する地域医療への能動的関与」

日 時：2023年9月16日(土)

場 所：オンライン開催

共同主催：日本薬学会、日本学術会議 地域共生社会における薬剤師職能分科会・薬学委員会、日本医療薬学会

- ・「AIが拓く創薬と医療の未来」

日 時：2024年1月12日(金)

場 所：日本学術会議講堂

共同主催：日本薬学会、日本学術会議 薬学委員会 生物系薬学分科会共催・協賛・講演

本学会と密接な関連をもつ団体の講演会、学術集会等の開催を共催、協賛あるいは後援し(国内136件、国際14件)、積極的に支援しました。

② 日本化学連合(一般社団法人)への参画

本団体は我が国の化学および化学技術関連学術団体の連合体(13学協会が正会員)として、化学と化学技術の振興を通して社会に貢献することを目的として活動しています。日本化学連合シンポジウムの開催(本学会と共催)、化学コミュニケーション賞の表彰などを実施しています。

③ 日本薬系学会連合への参画

本団体は、本学会が中心となって2023年7月3日に設立した我が国で初めて「薬」をキーワードにした学術団体を束ねる連合体として活動しています。設立時は26学協会から構成される任意団体でしたが、2024年2月2日に一般社団法人となり、会員学会は31学協会となっています。2024年5月11日には、設立記念フォーラムが長井記念ホールにて開催される予定です。

2) グローバル化の推進

諸外国の薬学関係団体や薬学関係者との交流を行い、本学会の国際的地位向上および薬学の国際的振興に寄与しました。

① 交流協定に基づく交流

・ドイツ薬学会 (DPHG)

2023年4月3日～5日には、ドイツ薬学会を通して、ドイツ化学会が開催する Frontier in Medicinal Chemistry へ医薬化学部会の推薦により高橋秀依氏（東京理科大薬）の派遣を行いました。また、2023年10月7日～11日に開催されたドイツ薬学会年会へ、本学会より岩渕会頭、米持副会頭の代表者2名を派遣しました。

招聘については、2023年11月13日～15日に第40回メディシナルケミストリーシンポジウム（医薬化学部会主催）にて1名の研究者を招き講演いただきました。

・韓国薬学会 (PSK)

第143年会（札幌）に代表者を招聘し、懇談を行い、2023年3月27日には日韓二国間交流事業シンポジウム「Natural products in drug discovery（創薬における天然物化学）」を開催いたしました。

・台湾薬学会 (PST)

台湾薬学会代表者3名が第143年会（札幌）を訪問し、懇談を行った後、2023年9月1日には岩渕会頭の訪台により、相互交流の覚書（memorandum of understanding: MOU）を締結しました。台湾薬学会より、第144年会（横浜）で二国間交流に基づくシンポジウムを送りたいとの打診があり、第144年会（横浜）にて発表予定です。

② その他

・カナダ薬学会 (CSPS)

2023年3月28日に第2回 PSJ/CSPS ジョイントシンポジウムとして、「Molecular and Preclinical imaging and the Pharmaceutical Sciences（薬学領域における分子イメージングの活用）」を開催しました。

・アジア医薬化学連合 AIMECS2023 (International Medicinal Chemistry Symposium)

2023年6月26日から28日に韓国のソウルにて、AIMECS2023が「New Era of Medicinal Chemistry: Challenges and Opportunities」をテーマに執り行われました。参加者は約850名、うち日本から40名以上と多くの参加者と水準の高い発表があり、学会の規模と医薬化学分野における日韓の有効が深まり、意義のある学会となりました。

・Dubai International Pharmaceuticals & Technologies Conference & Exhibition: DUPHAT

2024年1月9～11日にドバイで開催のDUPHAT 2024 (29th)へ、主催者からの要請に応じ、永田将司氏（東京医科歯科大病院薬）を派遣しました。

・本学会はFIP（国際薬剤師・薬学連合：International Pharmaceutical Federation）を2023年2月24日付にて退会いたしました。2023年4月27日にDominique Jordan会長とBPS会長のProf. Ross McKinnon氏の訪問があり、薬学会のFIP退会に関しての経緯の説明および、FIPよりの改善策が議論され、相互理解を深めた意見交換を行いました。日本FIP連絡会議へは今後オブザーバーとして参加することになりました。

5 学会基盤の整備・確立

1) 会員関連

(1) 会員増強への取り組み

次世代へ向けて、より一層の発展を目指すためにも、会員は学会の基盤であり、かけがえのない財産です。多岐に亘る薬学の学術の魅力の向上を図り、会員増強へ繋げてまいりました。

会員数増加に向けてのワーキンググループを立ち上げ、会員を増強するための方策と日本薬学会としての活動の活性化に繋げるための検討をしてまいりました。

若年層にも学会活動に親んでもらいたいという期待を含め、学生ジュニア会員、中高生会員、の2資格を新設しました。今後、支部・部会とも連携して当該会員へ向けた企画をより充実させていきたいと考えています。

また、これまで定年退職等が退会の理由になっている例が多く見受けられたことから、永年会員に加え、終身会員、シニア会員の2資格を新設しました。積み重ねてきた知見は何物にも代えがたいものです。会員継続により薬学の発展に引き続きご活躍いただきたいと考えております。

(2) 会員登録状況

会員数 (2023年1月31日現在)	15,319名
正会員	14,983名
(一般会員 12,027名)	
(学生会員 2,956名)	
海外会員	13名
永年会員	243名
有功会員 (第二項)	34名
名誉会員	46名
賛助会員	210機関

2023年度末 (2024年1月31日) 現在、正会員のうち1,384名が2023年度会費未納者でした。

(3) 名誉会員の推薦

定款第5条に基づき、理事会において名誉会員候補者1名の推薦を決定しました。

名誉会員 高山 廣光

(4) 永年会員の決定

定款第5条に基づき、理事会において永年会員22名を決定しました。永年会員には、記念品を贈呈いたしました。

永年会員	相本太刀夫	磯部 孝彦	井口 和男
	奥村 勝彦	小田切優樹	梶山 一代
	片岡 貞	木村聰城郎	木原 勝

木村 郁子	齊藤 慎一	白土 正三
田村 隼也	谷澤 久之	武田 寧
角田 紀子	手塚 雅勝	西尾伸太郎
長谷川 楨子	森井 慶子	安原 義
渡邊 君子		

2) 財政基盤の確立

(1) 賃貸収入と会館の運営

学会運営は、会費と学術事業収入等の経常収入によって賄われるべきものですが、本学会では収益事業として、会館の賃貸収入をもって学会運営の大きな部分の財務基盤を補完しているという特徴があります。賃貸事業は社会情勢の影響を多分に受けることから、常に状況把握を行い、管理代理会社と連繫を密にし、良質なテナントの確保に努めることにより、運営基盤の安定化に資するよう努力しております。

ならびに、学会が管理するホール、会議室などの会館施設の運営は、会員および一般の方への利用施設としての有効活用を委託先のビル管理会社と協力して利用者の便に供するよう努めました。

新型コロナ禍では、ホールや会議室の利用が低下していましたが、会議室ではその利用の回復が見られてきております。ポストコロナとなった後も社会情勢を十分に鑑み、テナントの維持や、会館の最大の効率的利用を引き続き継続して努力してまいります。

(2) 長井記念館の維持管理

当館の経年劣化に伴う修繕計画について、管理代理会社を始めとする関係各社からの情報を基に、主体的に把握するよう努めてきました。現長井記念館は竣工から30年以上が経過し、今後、修繕費の一層の増加が見込まれています。

理事会では、2021年12月より、常任理事以下のワーキンググループを発足し、長期的な長井記念館の維持管理のため計画的な改修の計画策定を進めています。

(3) 壽稻荷ご祭礼

当学会の初代会頭である、長井長義先生のご子孫がご寄贈下さった敷地の中に祀られている壽稻荷(ことぶきいなり)本殿に対し、毎年二(に)の午(うま)の日に日本薬学会主催でご祭礼を行っております。当本殿は、2009年(平成21年)に渋谷区の指定有形文化財に指定されています。本年度も、金王八幡宮の神職による神事を以下日程で執り行いました。

日 時：2023年2月7日(火)

場 所：日本薬学会長井記念館

・ * ・ 2023年度役員一覧 ・ * ・

会頭	岩淵 好治(東北大院薬)
副会頭	石井伊都子(千葉大病院薬)
	林 良雄(東京薬大薬)
	米持 悦生(星薬大)

常任理事	吉松賢太郎 (日本薬学会)	
総務担当理事	佐藤 美洋 (北大院薬)	中川 晋作 (阪大院薬)
	永津 明人 (金城学院大薬)	松本 司 (医療創生大薬)
財務担当理事	山本 恵子 (昭和薬大)	伊藤 清美 (武蔵野大薬)
広報担当理事	青木 一真 (第一三共)	小川美香子 (北大院薬)
	須貝 威 (慶應大薬)	
国際交流担当理事	葛原 隆 (徳島文理大薬)	
	佐藤 雅彦 (愛知学院大薬)	
編集担当理事	黒田 直敬 (長崎大薬)	高橋 秀依 (東京理大薬)
学術事業担当理事	金井 求 (東大院薬)	
	本間 真人 (筑波大医学医療系)	
	本村 隆尚 (日本たばこ産業)	加藤 将夫 (金沢大院薬)
	二木 史朗 (京都大学化学研)	
監 事	国嶋 崇隆 (神戸学院大薬)	平井みどり (神戸大)
	望月 眞弓 (慶應大)	
顧 問	高倉 喜信 (京大)	
	佐々木茂貴 (長崎国際大薬)	

—————・*・—————2023年度委員会・支部・部会一覧—————・*・

常置委員会

役員候補者選考委員会	佐藤 美洋 (北大院薬)
学会賞選考委員会	南 雅文 (北大院薬)
女性薬学研究者奨励賞選考委員会	林 良雄 (東京薬大薬)
創薬科学賞選考委員会	樋坂 章博 (千葉大院薬)
教育賞選考委員会	大津 史子 (名城大薬)
佐藤記念 医療貢献薬剤師賞選考委員会	眞野 成康 (東北大学病院)
創薬セミナー委員会	王子田彰夫 (九大院薬)
広報委員会	楠原 洋之 (東大院薬)
ファルマシア委員会	原 俊太郎 (昭和大薬)
学術誌編集委員会	大槻 純男 (熊本大院生命科学)
薬学雑誌	富岡 佳久 (東北大院薬)
CPB	中川 秀彦 (名市大院薬)
BPB	松沢 厚 (東北大院薬)
総務委員会	林 良雄 (東京薬大薬)
人事委員会	岩渕 好治 (東北大院薬)
財務委員会	林 良雄 (東京薬大薬)
国際交流委員会	石井伊都子 (千葉大病院薬)
年会問題検討委員会	岩渕 好治 (東北大院薬)
薬学教育委員会	中村 明弘 (昭和大薬)
ダイバーシティ推進委員会	林 良雄 (東京薬大薬)

特別委員会

長井記念薬学研究奨励特別委員会	高倉 喜信 (京大)
健康サポート薬局にかかる研修第三者確認委員会	松浦 克彦 (愛知学院大薬)

支部

北海道支部
東北支部
関東支部
東海支部
北陸支部
関西支部
中国四国支部
九州山口支部

柴山 良彦 (北医療大薬)
久下 周佐 (東北医薬大薬)
川邊 武史 (第一三共)
村木 克彦 (愛知学院大薬)
大黒 徹 (北陸大薬)
篠塚 和正 (武庫川女大薬)
山口健太郎 (徳島文理大香川薬)
有馬 英俊 (第一薬大)

部会

化学系薬学部会
医薬化学部会
生薬天然物部会
物理系薬学部会
構造活性相関部会
生物系薬学部会
薬理系薬学部会
環境・衛生部会
医療薬科学部会
レギュラトリーサイエンス部会

大和田智彦 (東大院薬)
青木 一真 (第一三共)
脇本 敏幸 (北大院薬)
加藤 博章 (京大院薬)
本間 光貴 (理化研)
服部 光治 (名市大薬)
上原 孝 (岡山大院医歯薬)
原 俊太郎 (昭和大薬)
堀 里子 (慶應大薬)
本間 正充 (国立衛研)

事務局

事務局長

奈良 洋